

■ Plastic

名古屋学芸大製作の映画『Plastic』(宮崎大祐監督)撮影中、撮休日にも本稿を書いている。

仙頭 武則

エンタメ

「おっちゃんとかうとと十四歳に戻ってしまっわ」と、出演した尾野真千子。一九九六年、奈良に住む一般の中学生だった彼女を映画の主演に据えて以来の仲だ。あえて敬称をつけずに呼びたい「マチコ」が現場に駆けつけてくれた。高揚を隠さない学生スタッフたちには自然体で気さくに声をかけて周り、撮影では見事な演技を披露してくれた。「今度家に遊びに来てな、待ってるで」と手を振りながらささっと帰っていくその姿を感慨深く眺め、確かな時の流れを感じた。振り返ると、ほとんどのスタッフが彼女を乗せた車にいつまでも手を振っている。来てもらって本当

大輪咲かせた「マチコ」

に良かったと実感した。

第一線で活躍するプロのスタッフと学生たちを融合させようと試みる今回の撮影にあたり、最も熟考したのは出演俳優だが、真っ先に浮かんだのが彼女だった。連絡を取ると二つ返事で快諾。私が沖繩に仮寓を構えていた頃、彼女が頻繁に訪ねてくれ、ドライブしながら、これまでのこと



撮影合間の、尾野真千子(左)と筆者。名古屋学芸大卒業生の森本瑞生さんが撮ってくれた。名古屋市内で

や今後のことを忌憚なく語り尽くした日々がよみがえる。

今では演技派俳優の地位を揺るぎないものにした「マチコ」だが、そこに至るには長い忍耐の日々があった。彼女にはできるだけ経験を積んでもらおうと、プロデュース作ではその機会をつくるよう心がけていた。明日二十九日から名古屋のセンチュリーシネマで、デジタルマスター完全版が公開される青山真治監督作『EUREKA/ユリイカ』もその中の一作だ。「ただただ、緊張してたことしか覚えてないわ」と彼女は振り返るが「心配無用、必ず大輪の花を咲かせるよ」と青山監督が太鼓判を押したことは後に現実となった。尾野真千子十八歳。大輪の花の芽がまばゆいばかりに映っている。

(名古屋学芸大教授、映画プロデューサー)次回掲載は八月二十五日)